

(山口 大樹) 論文内容の要旨

主 論 文

Evaluation of swallowing function in patients with oropharyngeal secretions

唾液の咽頭貯留を認める患者の嚥下機能評価

著者：山口大樹 三串伸哉 鮎瀬卓郎

(掲載雑誌名・Clinical and Experimental Dental Research, Article DOI:10.1002/cre2.223, 2019)

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科医療科学専攻

主任指導教員：鮎瀬 卓郎

緒 言

口腔内の唾液は嚥下において重要な役割を担っているが、同時に下気道へ口腔内常在菌を運ぶ媒体としての要素も持っている。唾液の誤嚥は誤嚥性肺炎の危険因子であり、唾液誤嚥患者が食物の誤嚥も引き起こしやすいことが過去に報告されている。しかし、咽頭感覚の低下が唾液の咽頭貯留や誤嚥・喉頭侵入を引き起こしうるものの具体的にどのような機能低下が唾液誤嚥を来しているのかについての病態の解明はこれまでなされていない。これらの背景から我々は咽頭機能の低下が唾液貯留または誤嚥につながり食物の誤嚥を引き起こしうるとの仮説をたて、嚥下内視鏡検査 (VE) と同日に行った嚥下造影検査 (VF) 画像を用いて咽頭の唾液貯留に至る機能低下の要因を調査した。

対象と方法

対象は2014年10月から2015年1月の間に長崎大学病院にて嚥下内視鏡検査 (VE) と嚥下造影検査 (VF) を同日施行した嚥下障害患者47例とした。VE画像からMurrayらの方法に従い4段階で咽頭内の唾液の貯留を評価した。更にVF画像より検査食の咽頭残留と奥舌咽頭後壁間接触の有無を評価し、嚥下時の舌骨・喉頭移動距離、食道入口部開大径を計測した。奥舌咽頭後壁間接触の有無に関しては対象患者をMurrayのスコア0及び1と2及び3の2群に分け、各群における奥舌咽頭後壁接触者数の割合を算出しFisherの正確確率検定を用いて比較した。その他の評価項目に関してはSpearmanの順位相関係数を用いて唾液貯留と各項目との相関を調べた。

結 果

唾液の貯留と検査食の喉頭蓋谷・梨状窩残留とのSpearmanの順位相関係数はそれぞれ-0.308、-0.351であり有意な相関を認めた。つまりVEで唾液の貯留が観察され、喉頭前庭まで唾液の浸入を認めた患者ほどVFにて梨状窩の残留が多い傾向にあった。食道入口部の開大径との相関係数は-0.504であり唾液貯留患者では食道入口部の開大径が少なかった。嚥下時における舌骨の水平方向の移動距離との相関係数は-0.384、喉頭の水平方向及び垂直方向の移動距離との順位相関係数はそれぞれ-0.374と

-0.555 で中等度以上の有意な相関を認めた。つまり唾液貯留患者では舌骨の前方移動および喉頭の前上方への移動量が少なかった。奥舌咽頭後壁間接触は Murray のスコア 0 及び 1 (唾液貯留が少ない患者群) における割合のほうが有意に大きく、唾液が貯留する患者ほど嚥下時に奥舌と咽頭後壁が接触しなかった。

考 察

本研究の結果より、唾液の貯留は咽頭収縮不全、喉頭挙上不全、食道入口部の開大不全といった咽頭機能の低下が影響していることがわかった。すなわち唾液の貯留や誤嚥を改善するためには、喉頭挙上や咽頭収縮力、食道入口部の開大を積極的に改善させる訓練が必要であることが示唆された。

(備考) ※日本語に限る。2000 字以内で記述。A4 版。